View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

brought to you by CORE

〔島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要　Vol. 55　113～121（2016）〕

父親による読み聞かせの実態

岩　田　英　作[1]　　マユー　あ　き[1]
岡　本　千佳子[2]　　尾　崎　智　子[2]　　内　田　絢　子[2]
（[1]総合文化学科　　[2]おはなしレストランライブラリー）

Reading of Picture Books by Fathers: A Fact-Finding Survey

Eisaku IWATA, Aki MAHIEU
Chikako OKAMOTO, Satoko OZAKI, Ayako UCHIDA

キーワード：父親・読み聞かせ・育児参加
father, reading to children, father's childcare involvement

１．はじめに

島根県では、第３次子供読書活動推進計画（平成26～30年度）に「読みメンプロジェクト」を盛り込み、男性による絵本の読み聞かせを進めている。全国でも女性の就業率が最も高い島根県では、男性の育児参加は喫緊の課題である。

「読みメンは育メンの第一歩」として、島根県は平成26年度より「父の日」のある６月を「読みメン月間」として策定し、県内の公立図書館38館で「お父さんにおすすめ絵本」の展示を行うなど、父親による読み聞かせ・育児参加の啓発に力を入れている。

島根発のこの取組は徐々に広がりを見せ、現時点で鳥取県（県立図書館）、大阪府（府教委）、香川県坂出市（市立図書館）が「読みメン」の連携を表明している。筆者は当初からこの「読みメン」の取組にかかわり、島根県立大学松江キャンパスおはなしレストランライブラリー（児童図書専門図書館）を拠点に、「読みメンてちょう」[1)]の配布などの活動を行っている。

しかしながら、「読みメン」の認知度は県内においてもまだまだ低く、「読みメンてちょう」の配布や図書館での父親向けの展示・講演などが、どの程度の効果を上げているか未知数である。そこで本研究では聞き取り調査を通じて、父親の読み聞かせについて実態を明らかにし、「読みメン」の普及と男性の育児参加の向上に活かしたい。

調査対象、調査時期、調査方法、調査内容は以下の通りである。

調査対象：島根県松江市在住で、乳幼児期の子供を持つ男性７人。おはなしレストランライブラリーの利用者で、複数回利用のある人の中から選んだ。従って、今回の調査対象は絵本や読み聞かせに一定の関心のある人に限られる。

調査期間：平成27年９月～11月

調査方法：直接対面方式による聞き取り

調査内容：家族構成、読み聞かせを始めた経緯、読み聞かせを子供に行うことによってもたらされたもの、好きな絵本、その他

2．読みメンの報告

1）Ａさん

家族構成：父Ａさん（38歳）、母、子（女子Ｍちゃん３歳）

（1）絵本は子供が触れる最初のアート

美術館勤務の学芸員Ａさんは、宮澤賢治が生まれた岩手県花巻市のご出身で、子供の頃より、賢治の童話作品に親しんでこられたようだ。そんなＡさんが絵本と出会うきっかけになったのは、勤務している美術館で開催されたエリック・カール展だった。以来、「子供が触れる最初のアート」として絵本を意識し始めたと言う。いかにも美術の専門家らしい絵本との出会い、そして関心の持ち方である。Ｍちゃんにも０歳の頃から、「読む」というより「見せる」という感じで、絵本は与えていたそうだ。

（2）おはなしレストランライブラリーはお気に入り

Ａさんが育児参加しなくてはという思いを持ち始めたちょうどその頃、おはなしレストランが島根県と共同して取り組む「読みメン」キャンペーンがタイミングよく始まる。さらに、おはなしレストランと県立美術館との共催による絵本作家tupera tuperaさんを迎えてのイベントに親子で参加したこともきっかけとなり、Ａさんはおはなしレストランライブラリーを利用するようになる。Ａさんは、ライブラリーを利用するようになってから、意識してＭちゃんに読み聞かせをするようになったと言う。そのライブラリーについては、駐車場もあって便利がよく、２週間で５冊借りることができること、そして何よりなごめる雰囲気がお気に入りで、ご家族で一緒に出かけることもよくあるそうだ。

（3）読み聞かせは寝る前の儀式

「毎晩、寝る前に行なう一種の儀式のように読み聞かせをやっています。」と言うＡさん。Ｍちゃんはこの時間、一番目がさえていて、Ａさんが読んでいる途中でうとうとし始めることなど一切ないらしい。Ｍちゃんのお気に入りは、おばけや鬼の出てくる絵本だ。Ａさんは、読んでいてはじけることができる文字の少ない絵本が得意であるのに対し、奥様はしっかり読み聞かせるタイプだそうだ。ご両親からいろいろな絵本を、それぞれのスタイルで読み聞かせてもらえるＭちゃんが、寝る前の読み聞かせの時間をどんなに楽しみにしているか、目に見えるような気がする。

（4）子育てにおける読み聞かせ

Ａさんは、自分が子供に読み聞かせをすることは、わが子と直接触れあうことができる貴重な時間であると同時に、家事を手伝うのと同様、妻の負担を軽くしていることに気づいたと言う。島根県と島根県立大学松江キャンパスおはなしレストランが協力して作成した「読みメン３か条」[2)]の一つに、「『読みメン』で家庭円満」がある。Ａさんの気づきは、まさにこの読みメン３か条に直結するものである。家族の心をしっかりつないでまとめていく、そんな不思議な力が、絵本にはやはりあるのかも知れない。

2）Ｂさん

家族構成：父Ｂさん（37歳）、母、子（女子Ｙちゃん２歳）

（1）はじめて親になる

奥様の妊娠中からお腹の子に読み聞かせをはじめたＢさん。特に理由やきっかけがあったわけではなく、「はじめて親になるので読みたいな」と思ったとのこと。出生後は、生後１か月頃から読んでいる。ごく自然に読み聞かせを始めているが、Ｂさんご自身は子供の頃は本をあまり読まず、特に好きだった本はないそうだ。だからこそ、Ｙちゃんには本に親しんで本の大好きな子に育ってほしいと願っている。

(2) 読み聞かせは遊びの一部

いつどんなときに読み聞かせをするかは特に決めていない。義務付けするのはいやだし、今はＹちゃんが「いやいや期」なのであまり読ませてもらえない。そういう時は無理強いしない。１対１になったときの遊びの一部ととらえて読んでいる。あとは就寝前。就寝前は自分で創作したおはなしをすることもあるという。その姿はあくまで自然体で、Ｙちゃんの日常に寄りそう中で、生活の一部に読み聞かせを取り入れていることがうかがえる。

(3) 子供の成長と反応のふしぎ

今まで読んできた中で、印象に残っているのが『ぴょーん！』（まつおかたつひで作・絵、ポプラ社）。いろいろな動物がでてきて「ぴょーん！」と跳ぶのにかたつむりだけ跳ばないこの本を、小さい頃は楽しんで聞いていたのに、１歳頃嫌がるようになった。何度読んでも、かたつむりの場面にくると本を閉じてしまう。なにか納得いかないという感じだった。それでしばらく読ませてもらえなかった。それが2歳になって久しぶりに読んだらすんなり聞いてくれた。それがとても不思議。なぜかはわからなくても、反応からＹちゃんのことをより理解し、寄りそっていこうとしている。今は「ことば」がすごく育ってきていて、絵本の中に知っているものがでてくると嬉しい様子。インタビューの間も絵本を開き、「ねこ」「ぞう」と言って、膝の中から誇らしげにお父さんを見上げるＹちゃんと、にっこり笑って応えるBさん。そこに言葉にならない会話がある。また、このように子供の成長を目の当たりにすることができるのも、読み聞かせの醍醐味だ。

(4) 家族で読むということ

実は奥様に対して劣等感があるというＢさん。「抑揚のつけ方や、間のとり方などうまいなあと思って聞いている。」しかし、まねをしようとは思わない。奥様もＢさんの読み聞かせを聞いている。子供に読み聞かせをしながら、実は夫婦で読み聞かせをしあっている。なんともうらやましい光景だ。

(5) 聞いてくれるならずっと

子供の頃は本を読まなくて、大人になってから読むようになったというＢさん。普段子供に接する仕事をされる中でも、本を読む子は情緒面が豊かで強いという実感がある。Ｙちゃんにも、いつまでと決めるわけでなく、聞いてくれるならずっと読んでいこうと思っている。

３）Ｃさん

家族構成：父Ｃさん（39歳）、母、子（女子Ｋちゃん５歳、男子Ｈくん３歳）

(1) 読み聞かせのきっかけ

長女のＫちゃんは、よく泣く赤ちゃんだった。奥様が、子育て支援センターで、読み聞かせをしている親子を見て、自分もやってみようと思った。家に帰って絵本を読んでみると、Ｋちゃんは、絵本をじっと見つめ泣き止んだ。それからも、Ｋちゃんは絵本を読むと泣き止むので、奥様が絵本をよく読むようになった。Ｃさんが絵本を初めて読んだのは、奥様が髪を切りに行くことになったとき。初めて家でKちゃんと２人きりになり、何もすることがない。試しにＣさんは、絵本を読んでみた。すると、Ｋちゃんは、じっと絵本見てくれ、聞いてくれた。そのときから、Ｃさんは絵本をＫちゃんに読むようになり、赤ちゃんの頃は、Ｃさんと奥様、半々くらいのペースで読んでいたそうだ。

(2) お気に入りの絵本

Ｋちゃんが赤ちゃんの頃は、同じ本を何回も繰り返し読んでいたとＣさん。赤ちゃんの頃、Ｋちゃんが喜んでいた本は、『がたんごとんがたんごとん』（安西水丸作、福音館書店）『じゃあじゃあびりびり』（まついのりこ作・絵、偕成社）『わんわんにゃーにゃー』（長新太作・絵、和田誠しあげ、福音館書店）など。Ｃさんは、何も見なくても絵本の題名がすらすらでてきた。きっと何回も読んで自然と覚えたのだろう。Ｃさんには、題名だけでなく、文章をすべて覚えてしまった絵本がある。長新太作の『キャベツくん』（長新太文・絵、文研出版）だ。Ｋちゃんが眠たそうにしていると、Ｋちゃんを抱っこし、ゆらゆらしながら『キャベツくん』を語ってあげた。すると、Ｋちゃんはすぐに夢の中。このおはなしをしているときのＣさんは優しい表情だった。その当時のことを思い浮かべながら、おはなし

されたのではと思う。

⑶ 絵本との出会い

今は、お子さんと図書館へ通われる回数も減ったが、第２子のＨ君が産まれたとき、Ｋちゃんと二人で、よく図書館へ通っていたＣさん。そのときに、ふと手にとった本『とげとげ』（内田麟太郎文、佐藤茉莉子絵、童心社）。この絵本をＫちゃんに読んだとき、自然と涙がでた。Ｃさんは自分でも驚いたそうだ。『はしれディーゼルきかんしゃデーデ』（すとうあさえ文、鈴木まもる絵、童心社）は、東日本大震災のことが描かれている絵本。この絵本を読んだときも、Ｃさんは涙がでたという。絵本を読むと「自分にもこんな思いがある」と、新鮮な気持ちを持つことができるのだそうだ。「絵本の読み聞かせのいいところは？」と聞くと、「感動できる本との出会いが楽しみ」という答えが返ってきた。絵本の読み聞かせが、恥ずかしかったり、億劫に感じる人もいると思うが、「自分と絵本との出会い」と思えば、読み聞かせに対する意識がいくらかは変わるのかもしれない。

⑷ 手作りの絵本

Ｃさんが文章を書いて、奥様が絵をつけられた手作りの絵本を２冊、見せていただいた。Ｋちゃんへの愛情をたっぷり感じることができる優しい絵本だった。きっとＫちゃんのことを思い、二人で一生懸命作られたのだろう。世界にたったひとつしかない絵本。この絵本、Ｋちゃんはもちろん大好き。Ｋちゃんが小さな頃に作られた本だが、今でも「読んで」と持ってくるらしい。この絵本は、これからもきっと大切にされていくことだろう。

⑸ 家族みんなで

Ｃさんは、本が好きでよく読む。でも、ご両親とも、絵本の読み聞かせをするのは、読まなきゃいけないからという気持ちも、子供達に本を読むようになって欲しいからという気持ちもない。Ｃさんは、絵本の読み聞かせと子供達との触れあいを純粋に楽しんでいる。Ｃさんは、絵本を読みながら、子供達を「びっくりさせてやろう」と思いながら読むこともあるらしい。おはなしを聞いていて、Ｃさんの読み聞かせを楽しそうに聞いているお子様たちの表情が、目に浮かぶようだった。

奥様は、「家族みんなで絵本を楽しむことができていて、みんなで絵本のおはなしができて嬉しい。自分が忙しいときに、Ｃさんが絵本を読んでくれるので、とても助かるんですよ」とにっこり。絵本を通して、家族がひとつになる。おはなしを聞いていてそう感じた。

４）Ｄさん

家族構成：父Ｄさん（33歳）、母、子（男子Ｏくん２歳）

⑴ 読みメンへの道

奥様が、保育士をしておられて、絵本のことに詳しかったこともあり、Ｏくんがお腹にいるときから、絵本を用意していた。Ｏくんが生まれてからわりとすぐに、Ｄさんも絵本を読むようになり、Ｏくんも聞いてくれた。最初は、読んでいるのを奥様に聞かれるのは恥ずかしかったが、すぐに慣れたそうだ。奥様に、「読み聞かせっていいことがあるよ」と言われて読み始めたが、そのことを意識せず、自分が読みたくて毎日読んでいる。

⑵ 読み聞かせは最良のコミュニケーション

平日は、Ｏくんと一緒に過ごす時間がほとんどないので、絵本の読み聞かせだけはしようとＤさんは心がけている。その時間は、自分にとっても大切な時間なのだそうだ。短い時間で密にかかわることができるのが、読み聞かせのいいところとＤさん。帰る時間が遅い時には、帰宅後すぐに読むこともあるという。仕事が忙しいとき、帰ってすぐにでも休憩したいことだろう。でも、Ｄさんは、読み聞かせの時間を苦痛に感じていない。むしろ楽しみにしている。

⑶ 子供の成長

『せんろはつづく』（鈴木まもる作、ひさかたチャイルド）という本。その本は、「どうする？」と読者に問いかける場面がある。最初読んだときは、「どうする？」と、Ｏくんに問いかけても、何も答えなかった。でも、１か月後に読んでみたら、自分なりの答えを教えてくれるようになった。そのことがとても嬉しく、「子供の成長を間近で見ることが

できるのも、読み聞かせの醍醐味だ」と笑顔を見せてくれた。

(4) 絵本の読み方

「淡々と読む方がいい」とどこかで聞いて、Ｄさんは、ずっと淡々と読んでいた。でも、おはなしレストランのスタッフから、「読み方は気にしないで、楽しんで読めばいい」とアドバイスを受けた。その言葉を聞いて、肩の力が抜け、読み聞かせがより楽しくなった。『みんなうんち』（五味太郎作、福音館書店）は、Ｏくんが大好きな絵本である。その本を、Ｄさんは、効果音をつけて読む。Ｏくんは、それが楽しくて仕方ないらしく、何回も読んでとせがむ。また、『おおきなかぶ』（A．トルストイ再話；内田莉莎子訳；佐藤忠良画、福音館書店）を読むときには、Ｏくんを絵本の中に登場させると、Ｏくんは喜んで聞いてくれる。絵本の読み聞かせを続けていくうちに、自分が絵本を工夫して読み、子供のリアクションを楽しむという楽しさもわかってきたとＤさん。子供がリアクションしてくれると嬉しくて、自分もその本が好きになり、もっと絵本が読みたくなる。でも、寝る前に、うんちやおならの本を読むと、Ｏくんが興奮して眠れなくなることがあって困るらしい。

(5) 絵本を読むのは楽しい、そして自然なこと

Ｄさんは学生時代、あまり本を読まなかったので、もっと読んでおけばよかったと思っている。Ｏくんには、本を読むようになって欲しいとＤさんは願っている。読み聞かせをすると、本を読むようになるのではと少し期待している。だからといって、「読まなきゃいけない」と読み聞かせが義務になるとつまらないから、自分自身も楽しんでいるとＤさん。絵本の読み聞かせをするようになり、絵本は大人が読んでも面白いと気付いた。これからも、何歳までということはなく、Ｏくんに「読んで」と言われるまで読み続けたい。

自分の周りには、読みメンがたくさんいる。「読みメンが定着してきているのでは」とＤさん。自分も読み聞かせをすることは、自然のことと思いやってきた。

読み聞かせに限らず、Ｄさんのように、子供との時間を大切にするお父さんが増えるといいと思う。

５）Ｅさん

家族構成：父Ｅさん（37歳）、母、子（女子Ｓちゃん９歳、男子Ａくん４歳）

(1) 絵本の読み聞かせに挑戦

今までは、子供達に「読んで」と頼まれたり、奥様に「読みなさい」と言われて、ごくたまに読んでいたＥさん。読み聞かせが嫌いだったという訳でもなかったが、自ら一緒に読もうと声をかけることはほとんどなかった。今回、奥様から「読みメン」のはなしを聞いて、挑戦してみようと思った。

(2) 読み聞かせって、けっこう楽しい

今回、ＥさんはA君中心に読んだ。平日は帰りが遅いので、休みの日に、３、４冊まとめて読んだ。基本的には、A君が選んだ本を読んだ。Ｅさんは親に絵本を読んでもらった記憶もないが、恥ずかしさもなかったし、どう読めばいいのかわからないということもなく、無理なく読むことができた。

読み聞かせは、膝にのせて読むのではなく、A君を隣に座らせて読んだ。その方法で読むと子供の表情も見えるし、反応を見ながら、ときにはおはなしをしながら読むことができてよかったそうだ。

Ｅさんはそんなに本を読まない。しかし、絵本は薄いし、１冊１冊絵の雰囲気が違うので、読むのが楽しかったらしい。読み方も、自分なりに工夫してみた。『すーべりだい』（鈴木のりたけ作、PHP研

究所）という本は、絵の中の滑り台をすべらせるように、登場人物を指さしながら読んだ。Ａ君も喜んで聞いていて、何回も「読んで」と持ってきたそうだ。『りんごりんごりんごりんごりんご』（安西水丸作、主婦の友社）という絵本は、「りんご」という言葉しか出てこないが、リズムよく読むと、Ａ君も喜び、それがEさんにも嬉しかったようだ。

Ｅさんは、今まであまり読んでいなかったとは思えないほど、自然に読み聞かせをしていた。しかも自分なりに工夫して読んでいた。「読み聞かせって難しい」と思っているお父さんたちも、１回読んでみれば、案外すんなりと読むことができるのではないだろうか。

(3) 絵本を通したコミュニケーション

Ｅさんは、Ａ君がもっといろいろな種類の本を持ってくるのではと予想していたが、同じ本を何回も読んでと言うことに驚いた。また、普段遊ぶようなものが出てくる絵本を気に入ると思っていたが、そうでもなかったことも意外だった。遊びと絵本の読み聞かせは違うと思ったらしい。Ｅさんは、読み聞かせをしている時のＡ君の様子をよく覚えていて、Ａ君の様子をいろいろと話してもらった。

Ｅさんは、絵本の読み聞かせについて感じたことも教えてくれた。「絵本の読み聞かせは、親と子の直接のコミュニケーションではなく、親と子と絵本の三角形のコミュニケーションになっている」。そういうところも面白いと感じたらしい。

(4) 子供が希望すれば続けたい

筆者がＡ君に「お父さんに読んでもらってどうだった？」と聞くと、「楽しかった」と笑顔で答えてくれた。今回、ＥさんはＡ君だけに絵本を読んだが、「Ｓちゃんにも読んであげたらいいのでは」と奥様から提案があった。「喜ばれますよ」と筆者たちもその提案にのったら、「そうかなあ」とＹさんは、少し恥ずかしそうだったが、まんざらでもない様子だった。

Ａ君が喜んで聞いていた『バルボンさんのおでかけ』（とよたかずひこ作、アリス館）は、Ｅさん一家みなさんのお気に入りの１冊である。この本にはシリーズがあり、筆者が紹介すると、家族４人で１冊の本を囲んでワイワイと盛り上がっていた。みなさんとてもいい笑顔だった。もし、Ｅさんが読み聞かせに挑戦していなかったら、見ることができなかった光景だろう。そんな光景を見ていると、１冊の絵本を通して家族みんなのコミュニケーションにもなることを痛感した。

「これからも読んであげたいですか？」の質問には、「本人が希望すれば読んでやりたい」とＥさん。「楽しいから」と「続けてもいいかなあ」の半々くらいの気持ちだそうだ。１年後くらいにまたお話が聞けたらと思う。

6）Ｆさん

家族構成：父Ｆさん（28歳）、母、子（男子Ｄくん１歳）

(1) 意識的に読み聞かせ

Ｄくんが生後６ヶ月のときから読み聞かせを始めたFさん。家にある本を、Ｄくんの調子が良くて、Fさん自身の手が空いているときに読んでいた。最近では、Ｆさんが絵本を読んでいると、Ｄくんが自分でページをめくりたがることも多い。読み聞かせは、奥様とＦさんのうち手の空いている方がやっているが、近頃は、意識的にＦさんが読むようにしていると言う。寝る前はＤくんがぐずってしまうこともあって、休みの日の夕方やお風呂の前後など、夜の空いた時間に読んでいる。親子ともに無理のないペースで、生活の中に読み聞かせを取り入れている。

(2) 子供が楽しそうに聞く本を

Ｄくんがずいぶん小さいうちから、読み聞かせをしているＦさん。当時のＤくんの反応を聞いてみると、「(絵本の方を）見てはいましたね。(内容が)分かっているかどうかは、分からないけれど」と笑いながら答えてくれた。読み聞かせを始めた当初は棒読みだったが、奥様が読み聞かせの際に抑揚などを付けるのが上手だったことから、Ｆさんも真似してやってみるようになったそうだ。今では、Ｆさんが絵本を読むと、Ｄくんは楽しそうに聞いている。リズム感のある絵本をテンポよく読むなど、「子供が楽しそうに聞く本を、いろいろ探したところもあ

る」という。「自分が楽しんでやるのが良いのかなと思う」と話すＦさん。読むことだけではなく、Ｄくんが楽しんで聞いてくれる本を探す過程も、きっと楽しんでいるのだろう。

(3) 読み聞かせは遊びの一環

Ｄくんの反応がよかった絵本として、まず名前が挙がったのが、『だるまさんと』（かがくいひろしさく、ブロンズ新社）。Ｆさんがだるまさんの絵に合わせて動きながら読むと、Ｄくんも一緒に動いているそうだ。『いないいないばあ』（松谷みよ子文、瀬川康男画、童心社）や『ぽんぽんポコポコ』（長谷川義史作、金の星社）もＤくんからのウケが良かったという。Ｄくんの好きな本を思い浮かべながら、「一緒に遊べるような絵本が良いのかもしれない」と、Ｆさんは話していた。読み聞かせは、特別な道具もどこかへ出かける必要もない。絵本が一冊あれば、どこででもできる。「今は、遊びの一環で読んでいます」という言葉から、Ｆさんは、Ｄくんとコミュニケーションを取る方法の一つとして、読み聞かせを生活に取り入れているのだろうと感じた。

(4) 良い習慣がつけば

子供の頃は、動物の絵本が好きだったというＦさん。小学校から高校までは、自ら進んで本を読むことはなかったという。20歳以降から小説などの本を読むようになったが、「もっと読んでおけばよかった」と思っているそうだ。だからこそＦさんは、「子供には、いい習慣がつけば」と考えている。Ｆさんが楽しみながら読み聞かせをする姿を、一番近くで見ているＤくん。これから成長していくにつれ、ＦさんがＤくんに読む絵本の幅も、どんどん広がっていくだろう。Ｆさん親子にとって、一緒に絵本を読む時間が楽しい時間としてこれから先も続いていくことを願いたい。

７）Ｇさん

家族構成：父Ｇさん（43歳）、母、（女子Ｉちゃん４歳、男子Ｊくん２歳）

(1) 子供の読みたい絵本が優先

Ｇさんが読み聞かせを始めたきっかけは、現在４歳になるＩちゃんが１歳か２歳くらいのとき、「読んで」と言って絵本を持ってきたこと。元々、奥様がずっと子守歌代わりに読み聞かせをしていたため、Ｉちゃんにとっては、絵本を読んでもらうことが既に習慣となっていたようだ。Ｇさんは、寝る前に読み聞かせをすることが最も多く、夕飯の前に読むこともある。日々の生活の中に、無理のない形で読み聞かせが取り入れられている。Ｇさんが読み聞かせをする際、読む絵本は、いつもＩちゃんとＪくんが選んでいるという。たまには、「お父さんは、この本が読みたい」と言いたくなる日もありそうなものだが、「親が好きな絵本と、子供が好きな絵本は違うから」と、お子様の読みたい絵本を優先するＧさん。Ｇさん自身が前へ出るのではなく、２人のお子様を中心として、親子で一緒に楽しんでいる。

(2) おはなしレストランライブラリーとの出会い

Ｇさんがおはなしレストランライブラリーを利用するようになって、１年半くらいになる。保育園でお子様がもらってきたチラシを見て、おはなしレストランライブラリーを知った。最初は、ＧさんとＩちゃんの２人で来ていたが、「良いところがあるよ」とＧさんが声をかけ、奥様とＪくんも一緒に来館するように。「子供たちが楽しいみたいで。すごく喜んで、行きたがるので」と、Ｇさん。嬉しい言葉をいただいた。今では「おはなしのじかん」に合わせて家族揃って来館し、絵本に親しんでいると言う。

(3)「読んで」と言われれば何でも読む

お子様と一緒に、たくさんの絵本に親しんでいるＧさん。“十八番”と言えるような絵本や、Ｇさん自身が好きだと思える絵本にはまだ出会っていないそうだが、日頃から一緒に絵本を楽しんでいるだけあって、お子様が好きな絵本の名前は次々と出てくる。中でも、お子様が２人とも大好きな絵本は、『だるまさんが』（かがくいひろし作、ブロンズ新社）。だるまさんの動きに合わせて、親子で一緒に身体を揺らしながら読んでいる。Ｇさんは「読みメンてちょう」も活用し、本の題名などと一緒にお子様の感想も書いているという。てちょうに記録しておくことで、絵本選びの際にてちょうを後から見返して、以前読んだ絵本の中から、お子様の好きな本をもう一度借りることができるようになったそう

だ。

読んでいて苦手だと感じる絵本も特になく、何でも読むと言うＧさん。ただ、「外国の絵本は翻訳が難しいのか、言い回しや言葉が少し難しいような気がする」という。だからと言って、日本の作家による言葉の優しい本ばかりを読む訳ではない。「子供は、絵がかわいいなど、絵を見て絵本を選ぶ。絵が楽しいじゃないですか、外国の絵本は。だから、子供に読んでと言われれば、何でも読みます」と、あくまで、お子様の好きな本を一緒に楽しむ姿勢だ。読み聞かせにも、絵本そのものにも、真摯に向き合っていることが伝わってくる。

（4）子供同士で読み聞かせ

最近では、お子様同士で読み聞かせをする姿も見られるようになった。Ｉちゃんはまだ字が読めないが、内容を覚えていて、Ｊくんに読み聞かせをしているという。気に入った絵本は毎日読むこともあるため、何度も読んでいるうちに自然と覚えているのだろう。お話を聞いたときのＩちゃんのお気に入りは、『もっちゃうもっちゃうもうもっちゃう』（土屋富士夫作・絵、徳間書店）。長めのお話だが、それでも覚えてしまうほど読んでいるということからも、Ｇさん親子にとって読み聞かせが習慣となっていることや、Ｉちゃん自身が絵本を好きで楽しんでいることがうかがえる。絵本だけではなく、お子様２人が向かい合って、紙芝居を読んでいることもあるそうだ。ＩちゃんはＪくんに読み聞かせをするとき、お母さんになりきったり、おはなしレストランライブラリーの学生の真似をしたりと、読み手としても絵本を楽しんでいるようだ。

（5）「読んで」と言われるうちは読み続けたい

Ｇさん自身は、子供の頃、自分ではあまり絵本を読んでいなかったそうだ。家には絵本があり、読んでもらっていたとは思うが、自分からはあまり手に取らなかったらしい。だからこそ、子供たちには本を読んでほしい、という思いもあり、読み聞かせをしているのだという。これからお子様たちが小学校へ入るにあたって、本を読んでいると字を覚えるのも早いし、いろいろなことに興味が出るようになる、という理由だ。読み聞かせをすることで、自然と本が身近になり、読むことが習慣になればいいと、Ｇさんは考えている。

今後、いつまで読み聞かせをするか、具体的な時期や年齢は考えたことがなかったというＧさん。お子様たちから「読んで」と言われるうちは、読み続けたいとのこと。このまま、日々の生活の一部として、家族みんなで絵本に親しんでいってほしいと思う。

３．総論

以上、家庭における父親の読み聞かせについて、７人の報告を見てきた。

「自然体」、「無理しない」というような言葉が報告にあったように、総じて彼らは読み聞かせに際して、いい意味で肩の力が抜けていた。子供にとって読書とはよいものであり、学力の伸長にも役立つらしいから、早期から読み聞かせを行って読書習慣を身に付けさせなくてはならないというような教育上の義務感、もしくは読み聞かせや読書に対する一般論にさほど左右されることなく、絵本の読み聞かせを日常生活にうまく溶け込ませて、子供と楽しんでいる姿が見られた。父親であれ母親であれ、読み聞かせを継続して行うには、読み聞かせを子供のためのものというよりも、子供と親が絵本を介して一緒に楽しむ時間と考えたほうがよいように思われる。

今回の７人の父親たちのお気に入りの絵本は、声に出してことばのリズムを楽しめる絵本、テンポよく読むことのできる絵本、読みながらからだを動かすような絵本が比較的多かった。Ａさんの報告には、「Ａさんは、読んでいてはじけることができる文字の少ない絵本が得意であるのに対し、奥様はしっかり読み聞かせるタイプ」とあった。父と母で読む絵本のジャンルも異なれば、それだけ子供にとっては受容する絵本の種類が広がる。絵本の種類が広がれば、子供は喜怒哀楽さまざまな感情を絵本を通して経験できる。

絵本の読み方についても、父親たちはマニュアルをさほど求めることなく、それぞれ子供の反応を見ながら工夫して読んでいる姿が見られた。このことに関して、ひとつ象徴的な出来事がＤさんの報告に

あった。絵本の読み聞かせは「淡々と読む方がいい」ということをどこかで聞いてそうしていた。しかし、読み方は気にしないで自分が楽しんで読んでみればというアドバイスを受けて、そうしてみたところ肩の力が抜けて、読み聞かせがいっそう楽しいものになったというのだ。読み方も絵本と同様に、淡々系からノリノリ系まで、いろいろあっていいのではないだろうか。

父親たちからの報告には、絵本の持つ力、読み聞かせの持つ力をまざまざと思い知らされるエピソードもあった。Ｂさんの子供は、『ぴょーん』（まつおかたつひで作・絵、ポプラ社）が大好きだった。ところが１歳になって、その中のかたつむりの場面にくるとおはなしを拒否するようになった。何度読んでも同じ場面で本を閉じてしまう。それが２歳になると、ふたたびすんなりと受け入れることができるようになったというのだ。理由はＢさんにもわからなかった。しかし、Ｂさんが絵本を読んでいなかったら、わが子の心の不思議にも遭遇することはなかったかも知れない。絵本の読み聞かせを通して、Ｂさんはまさに子供の心が動き、育っていることを目の当たりにしたのである。

絵本は、子供の心を動かしただけではなかった。Ｃさんは、『とげとげ』（内田麟太郎文、佐藤茉莉子絵、童心社）を子供に読みながら自然と涙があふれ、そんな自分に驚いたという。『とげとげ』は、からだにトゲがあって、仲間外れにされる女の子の話だ。東日本大震災を描いた『はしれディーゼルきかんしゃデーデ』（すとうあさえ文、鈴木まもる絵、童心社）を読んだ時も、涙を流している自分を発見した。絵本はときに自分の心の不思議をも垣間見せてくれることがある。

総論を締めくくるにあたって、父親と子供ともうひとり、母親の存在を忘れるわけにはいかない。父親が絵本を読むことで、母親の家事の負担の軽減につながっていることに気づいたというＡさん。Ｃさんの報告には、母親からの「みんなで絵本のおはなしができて嬉しい」という発言もあった。読み聞かせにあたって、どんな内容の絵本を読むかはむろん重要である。しかし、絵本の内容はともかく、絵本を読む行為そのものに大きな意義があることを忘れてはなるまい。

４．おわりに

筆者は、平成27年６月から７月にかけて、島根県松江市内の約4000家庭を対象として、家庭での読み聞かせに関するアンケート調査を実施した。

本稿で取り上げた父親による読み聞かせの実態と上記アンケートの調査結果を照らし合わせながら、今後は、家庭における読み聞かせについてより総合的に考察を深めていきたい。

最後に、協力していただいた７人の読みメンに、心より感謝申し上げる。

※本研究は、平成27年度しまね地域共育・共創研究助成金の採択を受けたものである。

※本稿に掲載した２枚の父親による読み聞かせの写真については、本人（父親）に掲載の許諾を得ている。

注

1）「読みメンてちょう」（島根県子ども読書活動推進会議発行）は、父親の読み聞かせ参加を促す目的で作成された手帳で、絵本を読んだ日付、絵本の題名、気づきなどを記入するようになっている。もちろん、父親以外の読書ノートとしても利用できる。

2）「読みメン３か条」は、父親による読み聞かせを啓発する目的で、島根県と島根県立大学松江キャンパスおはなしレストランが協力して作った標語である。「『読みメン』は『育メン』の第一歩」、「『読みメン』で家庭円満」、「『読みメンてちょう』は子どもへのプレゼント」の３か条からなる。

（受稿 平成28年５月12日，受理 平成28年６月23日）